

ジョージア (グルジア) 便り その61

騒乱の前兆かもしくはお祭りか

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ちょうど劇場での稽古が終わる時間になると、目の前の街で一番大きな通りが封鎖され、ジョージアの国旗を陸上選手のウイニングランのように背負った人々で道は埋まる。バスも止まっているので歩いて帰るのだが、家がある国会議事堂の方向に行くときさらに人だかりは増え、マイクから聞こえる興奮した声音が大きくなる。

彼らのロシアに対する抗議活動も今日で10日目になるが未だに終わる気配はない。

正教会を信奉する国家同士の国際会議がトビリシの国会議事堂であったのだが、なんらかのミスもしくは意図的にロシア代表が議長席に座り、ロシア語で演説をしたことが事の発端である。

ジョージアが有していた国土の20パーセントを現在ロシア軍によって占領されているのだから、民衆は、これを屈辱と受け取り大きな抗議活動に発展したのだ。初日には警官隊とデモ隊による衝突もあり、催涙ガスやゴム弾などが飛び交う惨事も起こってしまった。僕が住んでいる通りはちょうど国会の裏なので、その日は黒い服を着た何百人の警官隊が国会の門を守ろうと、

おしくらまんじゅうのように固めていた光景が脳裏に焼き付いている。

10日目となった今では簡易トイレが置かれ、子供連れの参加者も見受けられる。クーラーボックスの中に飲み物を入れた売り子までもが現れ、もはや通行止めされた歩行者天国だ。国会の前のバリケードの上では歌手が歌を披露し、デモ隊の無数のスマートフォンでライトで照らされる。初日に怪我を負った参加者がポップなアイコンになって流行を生み出している。どこかカーニバルのような雰囲気は否めない。しかし緊張感が薄れたとはいえ、大通りで友人と話すときにロシア語を使うことははばかられる。英語で話さなくてはいけないような空気が漂っているのだ。参加しているものたちはお祭り目的でも国を愛するものばかりだ。

ロシアに対して声を上げたジョージアの民だが、ロシアもそれに反応し、直行便を止めたり輸出の規制を大きくかけているようだ。特に観光産業が重要な産業であるジョージアは、大きなクライアントを失うことになりそうで、国を挙げて他の国から観光客をひきいれようと必死になっている。僕もその

一端を是非ジョージアのことを書くことで担いたいと思っているのだが、果たして観光客の多様化は必ずしも良いことばかりではないような気がする。現在あるジョージアは苦の歴史であるうかもしれないが、ロシア、ソ連との関わりで今ある独特な文化が形作られてきた。それを完全に否定することはジョージアの文化のアイデンティティを失ってしまう、ただの大自然豊かな国になってしまわないか。

大国に挟まれる小国の舵取りは前途多難である。是非日本の読者の皆さんにはこの小さな国を陰ながら応援してやってほしいものだ。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

